ミニシンポジウム記録 若手が拓く水産学研究：国際舞台で活躍する若手研究者たち

8. 英国セントアンドリュース大での研究員生活
—大型鯨類と鰐脚類の調査研究—青木かがり^a

セントアンドリュース大学

8. Life as a postdoc at University of St Andrews
in Scotland: Study of marine mammalsKAGARI AOKI^a*School of Biology, University of St Andrews, St Andrews,
Fife KY16 9TS, UK*

私はスコットランドの University of St Andrews, Sea Mammal Research Unit 研究所（以下、SMRU）にあるミラー博士（Dr. Patrick. J. O Miller）の研究室にポスドクして計3年間所属し、鯨類や鰐脚類の潜水行動やバイオメカニクスに関する研究を行った。その際の経験を日本との違い、苦勞したことと良かったことに着目して紹介したい。海外留学を考えている大学院生やポスドクの参考になればと思う。

1. きっかけ

私が大学院生の時に、ミラー博士が客員教授として来日した。ミラー博士は鯨類の鳴音や潜水行動を専門とし、第一線で活躍していた。当時、私の研究テーマはマッコウクジラの潜水行動で、ミラー博士の研究と強い関連があった。そのことがきっかけで、ミラー博士と共同で論文を執筆したり、野外調査に一緒に行ったりする機会に恵まれた。それから数年後に、ミラー博士からセントアンドリュース大でポスドクを公募するので応募してみないか、との話しがあった。留学経験のない私が突然英国の研究所で働けるのか不安だったが、せっかくのチャンスなので応募することにした。結果、無事に採用されセントアンドリュース大のポスドクとして一年間渡英した。それからさらに数年後に日本学術振興会の海外学術振特別研究員として採用され、計3年弱セントアンドリュース大に所属した。

2. 研究

日本との違い：現地所属のポスドクとして採用された際は、私の研究テーマと仕事内容ははっきりと決められていた。私の仕事は、ミラー博士の野外調査で使用する調査機材を作成することと、既に得られているデータを解析し一年以内に論文を投稿することだった。それまで

私は自分のペースで調査の準備、データ解析、論文執筆という一連の作業を行っていたので、その違いに戸惑った。プレッシャーは大きかったが、その分仕事が捗ったように思う。各プロジェクトでは、ボスはオーガナイズ、学生や研究員は主な実働部隊と、役割が分担されていた。海外学術特別研究員として同研究室に再び所属した際には、自由度は高くなったが、役割分担は比較的明確だった。日本の大学とのプロジェクトの進め方の違いを感じた。

良かったこと：SMRUには海生哺乳類の研究者が各国から集まっており、北極圏やアイスランド、ノルウェー等で調査する機会や共同研究する機会に恵まれた。また、新たな手法を学ぶことができた。様々な議論の場が頻繁にあり刺激を受けた。

苦勞：日本との物理的な距離があるため、日本国内の研究者や機関とのつながりを保ちづらく、就職活動に費用や時間がかかる。また、論文の書く速度の違いにショックを受けた。もちろん経験と能力の差もあるが、ネイティブでないことのハンデは大きい。

3. 生活

日本との違い：教授も学生も朝9時頃に研究室に来て、夕方6時頃には帰り余暇を楽しんでいる。土日に大学に来ている人はほとんどおらず、プライベートと仕事をきっちり分けている印象を受けた。

良かったこと：異なる言語や文化に触れ、価値観が広がった。

苦勞：最も苦勞したのは家族の理解を得ることである。私の夫も海外赴任していたものの、互いの仕事・研究のために家族と離れて暮らす選択をしなければならなかった。また、日本国内で雇用されている場合と異なり、現地採用や海外特別研究員の場合は日本の社会保険等が適用されない。自分で保険に加入したり必要な手続きを行ったりした。

4. この講演で伝えたいこと

私自身未だ不安定な身の上だが、海外での生活を通して、価値観や世界が広がったし度胸がついた。その先に何の保証もないかもしれないが、生活していく分には何とかなると思う。これから研究者を目指す方には（安定を求める人にはお勧めしないが）、日本だけでなく海外の研究機関も選択肢に入れることをお勧めしたい。

^a 日本学術振興会海外特別研究員（JSPS Postdoctoral Fellow for Research Abroad）